史料室だより No. 62 東洋英和女学院史料室委員会
発　行　2004年３月10日

夜間大学院の設置　－社会に開かれた大学を目ざして－

川　島　貞　雄

東洋英和女学院が創立120年を迎えるこの年は大学設立15年の年でもある。大学は開学以来、社会人学生の受け入れと種々の公開講座の実施をとおして生涯学習社会の要請に応えてきた。すでに開学５年目の1993年に社会人対象の夜間大学院が六本木校地に設置され、1997年には生涯学習センターが開設された。この２つは、社会に開かれた大学を目ざす本学の15年の歴史の中できわめて大きな意義を持つ。生涯学習センターについては塚本哲也前学長が『史料室だより』55号にお書きくださったので、ここでは大学院の設置について少し書いておきたい。

学院は1992年５月28日開催の理事会の決議により同年11月30日に文部省に大学院人間科学研究科・社会科学研究科修士課程設置の申請書を提出した。それは学者・研究者の養成を主眼とする従来型の大学院とは異なり、種々の職業分野の社会人に門戸を開き、価値観の多様化、高齢化、国際化が急速に進むわが国社会に対応できる広い視野と高度の専門知識を兼ね備えた人材の養成を目ざすものである。当時すでに大学院における有職者のリカレント教育の必要性が社会的に認識されつつあり、1991年11月25日に大学審議会から出された「大学院の量的整備について(答申)」も、「社会の多様な方面で活躍し得る人材の養成と社会人のリカレント教育」の必要性を強調し、「履修形態の多様化・弾力化」によってリカレント教育に対する需要の高まりに応じるべきであるとしている。

しかしわれわれの大学院の設置は実際にはむずかしい問題を抱えていた。まず校舎である。有職者を主たる対象とする大学院であるので、勤務先からの通学の便を考えると、校舎は六本木に別置する必要があった。このために、かつて短期大学の校舎であった本部棟を改造し、地階、３階、４階を大学院の校舎とする計画を立てたが、すでに中学部、高等部が短期大学跡地をグランドとして使用することを考えていた。学院内で話し合いが重ねられたのち、1992年3月16日に開催された臨時理事会において、「本部棟の改築・移転を含め、立地上の基本的条件が変わる場合においては改めて十分に協議すること」を条件に、その建物を部分的に大学院校舎とすることが承認された。

第２に設置審査である。そのころは有職者対象の夜間大学院は数少なく、本学の大学院はその先駆的存在のひとつであった。それはその後に設置申請が予想されるこの種の大学院にとってモデルケースにもなるので、文部省の審査は厳しく、1993年２月５日に行われた実地審査では①研究指導体制、②図書室、③研究室の整備が求められ、④学生の確保の見通しについて詳しく問われた。いずれも大学院の存立にかかわる基本的な重要事項である。学院は速やかに対策を講じ、３月19日にようやく設置が認可された。認可と同時に1993年度前期の学生募集を開始し、４月24日と５月１日に入学試験を実施した。入学定員は両研究科とも前期後期合わせて25人であったが、人間科学研究科に81人、社会科学研究科に25人が出願し、それぞれ20人、13人が合格、５月14日に第1回入学式が挙行された。

1995年３月に第１期生が巣立ってから昨年９月までの８年半に修了者は人間科学研究科238人、社会科学研究科91人を数えた。人間科学研究科は臨床心理士育成の第1種指定校となり(1996年)、幼稚園教諭専修免許の取得を可能にする幼児教育コースも新設(2003年)、その前年の2002年には博士後期課程を設置した。社会科学研究科は時代のニーズに応えて名称を国際協力研究科に変更し、教育課程を改定した(2003年)。昨年は本部・大学院棟の竣工も見た。しかし今日、有職者対象の夜間大学院は増え、学生の確保は厳しくなりつつある。大学院が真価を問われる時である。とくに研究指導体制のいっそうの整備が求められる。

(大学教授)

〈思い出の先生がた〉 7

井上健之助先生のこと

黒川信也

1946(昭和21)年からの24年間、先生が東洋英和で責務を担っておられた時期を思いますと、真に時に適った教育者であり、学院の歴史の要請に応える働きをなした先生であったことに改めて気づかされます。

かつてない一大変革期に、中学以来の友人であった当時の長野彌院長の要請をうけて、中高の教務主任として着任された折の心境は、察するに余りあるものでありましょう。

組織の編成、教務上の整備と措置、生徒の自治活動の指導等どれもが時間の猶予のない対応に迫られるものであり、かつ制度の改革が続いた日々で大変なご苦労であったようであります。私自身も10数年、教頭・部長としての先生に直接ご指導を受けた一人ですが、このご心労は赴任当初だけでなく、在職の最後まで続いていたようで、遅くまで仕事をなさっている先生のお姿をよくお見かけしました。

漢詩、詩吟、囲碁、テニス、弓道、絵画、書道等趣味が広く、天分豊かな先生であったからこそ、それらに充分時間を当てることは出来なかったものの、責務・激務のストレスにもめげず、校務を見事に全うされたのだと思います。それにしても、先生の書は、すっきりとした気品のある美しい文字でとても印象深いものでした。古風な武士の風貌をもち、遠くをみつめているかのような先生は、私ども若いものにはおだやかに接してくださいましたが、ご自身には厳しかったようですし、また長野院長と激論を交わすこともままあったと伺いました。

漢詩に精通し、それなりの理想と見識を持っておられた先生が、40歳を過ぎてキリスト教に触れやがて入信されるについては、学院七十年誌の編集完成に全責任をもって当たられたことが深い契機になっていると

いうことです。当時はまだまだ史料の乏しい中にあって大変なご苦労だったと思いますが、学院の歴史を担われた幾多の証人に接して信仰の決断をなさったということに、改めて神の摂理を知らされたことでした。

先生のお働きは、「ともすれば内にこもって独善的になり易い東洋英和の教育を伸ばし、短所は改めて、東京の私立中学・高等学校の中で特色のあるそして比較的内容の充実した学校と世間からも評価されるようになったのも凡て井上先生に負う処極めて大であった」(長野元院長)という言葉に集約されていると思います。

(前高等部部長)

井上健之助先生略歴

1903年　山形県北村郡に生まれる
1927年　大東文化学院本科卒業
1930年　大東文化学院高等科卒業
1933年　兵庫県武庫郡大庄尋常小学校勤務
1940年　尼崎市立高等女学校勤務
1944年　株式会社久々知工作所入社
1946年　東洋永和高等女学校勤務　教務主任
1963年　東洋英和女学院中学部部長・高等部教頭就任
1970年7月27日　逝去（享年67歳）

〈資料紹介〉 5　定期刊行物
『敬和会』

陶　山　義　雄

敬和会の会報について創刊第１号（1970年１月）の後書きにこう記されている。「１月の礼拝後の集いの時に、たまたま出た話題がもとになって、いつもお忙しい深町正信先生が又いとも気軽にこの会報の発行を助けて下さると仰しゃっていただきましたので、私共もすっかり乗気になって、急にお話がまとまりました。…大体２ヶ月に１度位の予定でお手許にお届けしたいと存じます。…木山房子」更に1972年５月（第12号）に－敬和会では毎月１回の集会で、礼拝を守り、礼拝後はお茶をいただきながら、家庭のこと、社会のこと、時事問題などお話がはずみます。主として卒業生のお母様方のために生まれたのが敬和会です。家庭や健康の事情で集会に出席できない方々のために。また、会員同志の心の交わりのために、一筋の糸ともなればと願って、年３・４回の予定で発行しています。－上記の主旨にそって毎号、必ず礼拝説教が巻頭に掲げられている。当初は山北多喜彦、深町正信、山北宣久牧師らが交代で巻頭説教・論文を執筆している。50号（88年11月）以降になると、大木英夫、近藤勝彦、長山信夫牧師たちが加わっているが、山北（多）、深町の両先生を欠いてこの会報は存在しなかったと言えるほど、両先生の働きに依存している。会報が出される以前からご指導いただいた４人の先生がある。50号記念号に、山北多喜彦、長野彌、濱崎次郎、太田俊夫などの先生方が敬和会「草創時代の指導者」として紹介されている。

１号から９号（71年４月）までは硬筆謄写印刷であったが、10号（71年６月）以降はB５版に縦書４段の活版印刷になり、４ページで終わるものから、特集を組んで68頁（50号）に及ぶものもある。標準的には16頁から20頁である。

説教のほかに「敬和会」で欠かさず殆ど毎回にわたって掲載されているのが、深町正信牧師による「ジョン・ウエスレー研究」で30回に及ぶ連載であった。ウエスレーについては他に、山内一郎牧師の講演、深町牧師の講演が掲載されている。会報ではメソディズムと信仰生活が柱に据えられている。創刊号には大学紛争が言及されていたり、日基教団総会の混乱への憂慮が語られているが、また、高度経済成長にとりのこされた人間の佇まい、親子関係、教師と生徒の関係などが問題とされる状況の中で、太田俊夫先生の講話も会報に欠かせないコラムであったことが分かる。

今では貴重な史料となる記事が会報には数多く収録されている。先ず、「カナダ・メソジスト教会宣教師～その人となりと信仰」をシリーズで36号より掲載している。その第１回は長野彌元院長でカートメルから始まり、ブラックモア、ハミルトン、キニー、バット博士、コーテス、コーテスとベーツ、クラーク、ノルマン、カクランとマクドナルド、レーマン、マクラクラン、マシューソン、アーレン、クック、カートメルの手紙、ブラックモアの手紙、スペンサーの手紙、最後はブラウン宣教師による全宣教師の一覧で閉じている。

野尻学荘施設の由来と思い出、シュヴァイツァー博士に仕えた高橋功医師と武子夫人の記録、荒木洋二氏のベトちゃん・ドクちゃん「分離手術に立ち合って」、斎藤武氏の「ホスピスと教会」、横浜新校地開設から大学開学と礼拝堂建設準備から完成まで、長岡輝子の随想、娘からみた村岡花子、青山墓地に眠る宣教師と墓石写真、その地番など、どれも貴重な史料になる筈だ。

卒業生父母にとって、また卒業生にとっても恩師・朋友との永久の別れは痛みであると同時に、貴重な宝の継承である。以下の方々の追悼、告別説教、思い出などが会報では大きく扱われている：山北多喜彦、高橋武子、鵜沼さき、濱崎次郎、長野彌、マシューソン、石井次郎、光明照子、江良顕三郎、清水二郎。

「敬和会」は会報紙の域を超えて、キリスト教界や教育界に向かって語りかけた証言である。また、伝道の文書である。山北宣久牧師が60号で述べている通り、「敬和会、それは主を礼拝する群れとして厳然として存在しつづけている。」たとえ、会報は途絶えたとしても、東洋英和の繋がりの中で、今後も存在しつづけるよう祈るものである。

なお「敬和会」は61号（1997.6）をもって終刊し、現在、その精神は虹の会の会報「Niji」に受け継がれている。

（大学教授・史料室委員）

『母の会だより』

酒　井　ふみよ

『母の会だより』は中学部高等部「母の会」(1935年設立)の会報として1961(昭和36)年に創刊された。“会員相互の理解と親睦を深めると共に、会に都合で出席できなかった方々に、学校の近況とか学級母の会の様子などを知らせたり、或いは共通の問題についてお互いの意見を開陳して一層の研究をするなど…家庭、生徒、学校の三者が一体となり、相互のよき理解と協力とが教育の効果を一層適格にするために…読んで楽しい、前向きの互いの信頼感を増す内容のもの”をめざしていた。(長野院長先生の「発刊に際して」より)

タブロイド版平均８～10面の体裁や、当時役員の方の筆書きの標題も３号よりずっと変わらない。活動の活発さを物語るように、最初は年３回、３年目より年２回欠かさず発行され、現在は91号までを数える。

１面あるいは１・２面にわたり、院長・部長・教頭先生の所感や随筆が楕円形の顔写真と共に掲載される。それは学院の精神や教育方針を確認する所信表明であったり、生徒との会話や身辺のことからさりげなく語られるものであったりと、歴代の責任をとられる諸先生方の熱い思いがこめられている。22号まで毎号巻頭を飾られていた長野・井上先生をはじめとして、諸先生方から家庭に対し学院の教育への理解を求める姿勢が強く感じられる。

前期号には新任教師の紹介、学年担任からの一言などが担任が学年ごとに並んだ写真と共に紹介されるのが、31号より定番となった。また、卒業生の進学状況もこの頃から掲載され、進路が多様化するにつれ多くのスペースを占めるが、前期号は形式がほぼ定まっている。後期号の方が自由に企画し特集を組んでいる。

80周年以降学院の節目である年には特集が組まれ、学院の歴史がたどられる。90周年特集の34号は、生徒会新聞部の文化祭展示の一部を紹介しながら旧教員や卒業生を訪問するなど20面もの大作となっている。100周年の時は２年前の51号から始まり、54号では16面構成で、特別行事の紹介の他『英和の第２世紀を想う』と題しており、原点に立ち返って次の一歩を踏み出そうという英和関係者一同の高揚した気分が読み取れる。この頃は校舎建て替えや短大の横浜校地移転、大学新設など大きなプロジェクトが動いた頃であり、母の会だよりが学校と家庭を結ぶ重要な使命を果たしていたと言えると思う。76号はカラー写真入りで新校舎竣工を祝い、また母の会創立60周年にあたって、母の会の歴史がつづられている。

家庭の関心事である進路、受験のこと、留学、そして生徒たちの学校生活のようす、家庭のあり方などは随時取り上げられて話題を提供し、校外活動、野尻キャンプなどについても参加者や卒業生の感想を通し、紹介をしている。

母の会行事･各部の報告、教員の消息が毎号後半に掲載される。学生運動の盛んであった時期に多くの教員の参加を得て懇談会が持たれたことや、聖書研究会、ボランティアの会のようす、ハンドベルその他のクラブ発足などから母の会活動のようすや変遷をうかがい知ることができる。講演会では高名な作家や学者の方、演劇界のスターなどをお招きしている。

会員の寄稿は、初期は和歌や詩、著名な方の文章も見られるが、50号あたりから入学か卒業にあたってその喜びを語るものに限られてきた。一方教員の寄稿は、初期には飾らない雑感をつづったもの、家庭への注文なども見られるが、しだいに旅行記が多くまた数も少なくなった。最近は文章を減らし写真やレイアウトを工夫しており、読みやすさが重視されているようだ。

特筆すべきなのは、これらの編集が毎年一新される母の会委員によってなされてきたことである。そのため誌面構成などは不統一とはいえ、母親の温もりがあり、こうした作業に全く不慣れな方々が額を集めて企画から始めて校正まで仕上げられるご苦労と熱意に賛辞を贈りたい。

百年史編纂にあたられた斉藤浩二先生が58号で語っておられるように、母の会だよりは学院の歩みを知る上で貴重な資料である。学院を支える母の会活動と共に、今後も一層の充実と継続が期待される。なお、欠号は２号のみ。

(中高部教諭・史料室委員)

2003年度　史料室報告

3月・『史料室だより』61号のため、旧教員冨岡正男先生宅訪問(酒井・古澤・谷川委員)
・論文(明治の女子教育)の資料収集のため、日本女子大講師、来室
・東洋英和学校神学部について問合せあり
・写真展「私と町の物語―白金・六本木・青山」見学
・校主・設立者、平岩愃保の資料収集のため北海道大学教授、来室

4月・史料室が中高部3Fより、史料室書庫が本部棟3Fより本部・大学院棟地下2Fに移転。それにともなう諸整理
・卒業生より、「青楓寮」について問合せあり
・TV番組「グレートマザー物語」(波野久枝編)＜中村勘九郎・波野久里子の母＞のための取材あり
・DNP年史センターと資料整理について第1回打ち合わせ。

5月・「永坂孤女院」と佐野きみについて問合せあり
・昭和初期の私立小学校に関する史料収集のため、研究者来室
・『敬和会』1号～61号(最終号)を合冊にする
・六本木周辺の古い写真を探している、都市建築研究会のメンバー来室。
・ミス・イェードン(元中高部英語科教師)来室

6月・DNP年史センターと資料整理について第2回打合せ

7月・コーツ氏及びコーツ夫人(ウィンタミュート女史)について問合せあり
・全国疎開学童連絡協議会(「語り継ぐ学童疎開」展)に写真を提供
・柳原白蓮関係資料閲覧及び収集のため、宮崎芝蕗邸訪問

1910年卒業写真　　上から2段目の右端　柳原白蓮
〃　　左端　村岡花子

・東洋英和学校創立者江原素六の資料閲覧及び収集のため、沼津市明治史料館（江原素六コーナー)訪問

9月・現幼稚園の土地取得のいきさつについて確認のため、竹中工務店来訪

10月・DNP年史センターと資料整理について第3回打合せ
・自伝執筆の資料収集のため、1941年卒原田知津子氏来室
・短大同窓会「かえで会」会員、史料室見学
・中高部教諭より宣教師Bott氏についての問合せあり

11月・『史料室だより』61号刊行
・高等部3年生の十数名　史料室見学
・中高部母の会役員　史料室見学
・『楓園』35号のために、柳原白蓮関係資料提供
・明治末の東洋英和周辺の地図の件で六本木商店街振興会を訪問
・DNP年史センター主催のセミナーに参加「日本アーカイブズ学会(仮称)の設立をめぐる動向」「100年史の編纂について　書籍、CD-ROMの製作と活用」
・齋藤實記念館に仁礼(齋藤)春子氏と淵澤能恵氏について新たに判明した事を連絡

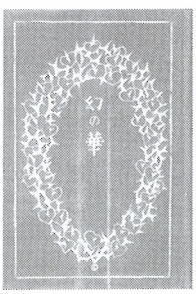
12月・普連土学園　史料室見学
・資料収集のため、麻布学園資料室訪問
・大学(人間科学部)森眞理助教授と学生19名、史料室見学

1月・銀座教会でのジョン・ウェスレー生誕300年記念の展示のために、資料提供

〔史料室へのおもな寄贈品〕)
・『戦前期女子高等教育の量的拡大過程』
・『神奈川大学史資料集第　19集』
・『学院史料　第18号』神戸女学院史料室
・『松蔭女子学院　史料　第5集　書簡集Ⅲ』
・『同志社談叢　23号』同志社社史資料室
・『咲き続ける秋月の葛－江藤家400年の歩み』
・『蛙の子は蛙の子―阿川弘之・阿川佐和子父と娘の往復書簡』
・小学部『児童名簿』・『小羊』3号～9号
・東洋英和女学校校舎設計図
・『立教学院史研究』創刊号

・ビデオ「日本人を越えたニホン人－メレル・ヴォーリズ」
・『国際文化会館50年の歩み』
・感話集『精神的な生活』
・中高部職員室　赤・黒木札
・『やまなし　女性の文学』
・ビデオ「わが心に刻まれし乙女たち」(日本語版)・「The Life of ELIZABETH RUSSELL」(英語版)
・CD「風にそよぐうつくしきもの」第117回卒業記念
・『全国大学史資料協議会　東日本部会の十年の歩み』・『研究叢書』1~3号
・1910(明治43)年卒業写真－柳原白蓮・村岡花子卒業時
・『HIGHER EDUCATION FOR TOMORROW』－国際基督教大学
・旧短期大学公印
・英和の校章入り2色ボールペン
・『関西学院事典』
・「長野先生送別会粗案」・「長野先生送別会支出報告」
・『コイノニア』2～7・9・11・13・21号(これにより全号揃う)
・『属澄江先生　想い出アルバム』ピアニスト(1927年卒)
・『江原素六の生涯』
・『定年後は海外ボランティアで「自分の経験」を生かそう』
・『バターン遠い道のりのさきに』
・『帰国子女の会フレンズの歩み』

〔おもな購入図書〕
＊片山廣子〈松村みね子〉関係(1894年卒)
翻訳『鷹の井戸』
＊柳原白蓮関係〈宮崎燁子〉(1910年卒)
歌集『幻の華』・『紫の梅』・『踏絵』
自伝『火の国の恋』
＊村岡花子(1913年卒)
随筆『雨の中の微笑み』・『母心随想』
『光に向ふ』・『心の饗宴』
童話『青イクツ』・『日本イソップ絵物語』
小説『エステル物語』
翻訳『母の生活』
編集『わが少女の日』
＊長岡輝子(1925年卒)
『夫からの贈り物』
『わが町－溝の口　長岡輝子WORK』
『老いてなおこころ愉しく美しく』
詩集『詩暦』
翻訳『ジャン・ド・ラ・リュンヌ』
『ドミノ』
CD「宮沢賢治の魅力」長岡輝子朗読1～4
＊吉田ルイ子(1953年卒)
『世界おんな風土記』・『女たちのアジア』
『華齢な女たち　beautiful age』
『わたしはネコロジスト』
『ハーレムの熱い日々』
『自分をさがして旅に生きてます』
『南ア・アパルトヘイト共和国』
『サンディーノのこどもたち』
＊北三季〈東久邇久子〉(1965年卒)
絵本『のねずみウィスカー』
＊松本寛二(小学部元部長)
『神さまはお急ぎにならない』
＊阿川佐和子(1972年卒)
『もしかして愛だった』・『いつもひとりで』
＊榊寿子(1967年卒・英和幼稚園嘱託－栄養士)
『自然食生活のすすめ』
＊『江原素六』　辻真澄
＊『麻布中学と江原素六』　川又一英
＊『日本の幼児教育につくした宣教師　上』
小林恵子



お詫びと訂正　前号(No.61)5頁「松本寛二先生との思い出」の冒頭3行の記述「1980年6月の突然のご事情で当時の部長、秋月先生が退職されることになり、小学部では部長不在になってしまいました」は「1980年9月30日をもって当時の部長、秋月先生が退職されることになりました」に訂正いたします。秋月徹先生のご退職の翌日1980年10月1日に後任として松本寛二先生が就任されましたので、小学部部長が不在になった時はありませんでした。関係諸氏にご迷惑をおかけしたことをお詫びいたします。

史料室委員会委員長　川島貞雄